

漢方治療は麻酔科ペインクリニック領域において有用

公益財団法人東京都保健医療公社 東部地域病院 麻酔科 部長 本山 慶昌 先生



1987年 台北医学院 医学部 卒業
1988年 順天堂大学 医学部 麻酔科
1990年 セントルイス大学 薬理生理学教室
1998年 東京警察病院 麻酔科 部長
2006年 東部地域病院 麻酔科 部長
(2014-2016年 順天堂大学 漢方医学先端臨床センター講座 非常勤講師)

アニメ作品の舞台にもなっている東京都葛飾区亀有に位置する東部地域病院は、1990年に東京都区東北部保健医療圏における地域支援病院として設立され、今や地域医療における中核的な存在として機能している。同院麻酔科の本山慶昌先生は、ペインクリニック専門外来において漢方治療を積極的に取り入れ、治療実績を向上されている。そこで、麻酔科ペインクリニックにおける漢方治療の実際について本山先生にお聞きした。

東京で初めての地域医療支援病院

当院は、東京都と東京都医師会が共同で設立した公益財団法人東京都保健医療公社が運営する第1号の病院であり、東京都区部の東部地域(葛飾区・足立区・荒川区)における地域中核病院として開院しました。当院は二次医療を中心とした地域医療支援病院であり、さらに開放型病院として承認されていることから、地域のかかりつけ医療機関の先生方と当院の医師が共同診療できるという特徴があります。

当院の麻酔科は6名の常勤医師が在籍し、年間約2,500件の麻酔科管理下での手術における周術期管理を行っています。さらに、専門外来としてペインクリニック外来を週3日(月・水・金の午前)開設しています。

当科外来を受診される患者さんは、地域のかかりつけ医療機関から紹介される、治療に難渋されている疼痛の患者さんが主ですが、院内からの紹介患者さんも多くいらっしゃいます。当科外来には約40人/日が受診されますが、約6割に神経ブロックを施行しています。

漢方治療を積極的に取り入れるペインクリニック

当科では、漢方治療も積極的に取り入れています。神経

ブロックと漢方治療は乖離している印象があるかもしれませんが、たとえば交感神経ブロックは気を巡らせ、血液循環を改善する駆瘀血というように共通点があります。このように漢方治療はペインクリニックに親和性の高い治療法といえます。

疼痛治療において、抗うつ薬や抗けいれん薬、抗不安薬などの鎮痛補助薬を用いることも多くありますが、特に高齢患者さんではふらつきなどが心配されます。そのようなときに漢方治療を併用することで、鎮痛補助薬の服用量を減らすこともできることを経験しています。この他にも、神経ブロックが不応の患者さんや施術時に出血が懸念されるような患者さんなどにも漢方薬は非常に役立ちます。

当科では、患者さんの5~6割は漢方薬を使用しています。さらに、漢方治療で満足された患者さんが、他の併存疾患の治療にも漢方治療を要望されることがあり、当科は“漢方診療科”としての側面も有しています。

補中益気湯の服用で漢方治療の有用性を実感

私が漢方薬を初めて服用したのは中学2年生の頃です。当時、蕁麻疹を発症したのですが、その治療に消風散が処方されました。ところが、服用によって症状が悪化してしまい、すぐに服用を中止しました。

その後は漢方に興味を持つこともなかったのですが、医師になって7~8年目に慢性的な疲労に悩まされていました。そのような時にある医師から補中益気湯の服用を勧められ恐る恐る服用したところ、疲労感が軽減して朝も早くにスッキリと起きることができるようになり、その後は繰り返していた蕁麻疹も現れなくなりました。

このような実体験があつてから漢方に興味をもつようになり、真剣に漢方の勉強を始めるようになりました。

ペインクリニックにおける漢方治療

当科では整形外科領域の疼痛患者さんが多く、特に脊柱管狭窄症が多いことから八味地黄丸や当帰四逆加呉茱萸生姜湯、さらに附子末を加えるなど温める処方を使用する機会が多くあります。その他にも、柴胡剤の抑肝散、四逆散や小柴胡湯、また利尿剤などの五苓散を用いることもあります。

漢方治療が奏効した症例を紹介します。症例は、腰部脊柱管狭窄症で下肢疼痛を訴える60歳代の男性です。神経ブロックでも満足できる効果が得られません。そこで詳細に問診したところ瘀血があり、1週間も便秘が続くということから桃核承気湯を使用しました。しかもこの患者さんは少しのことで激高するようなタイプだったのですが、服用開始後速やかに便秘が改善し、疼痛も徐々に緩和してきてだけでなく、非常に穏やかになりました。このように瘀血の改善が疼痛緩和につながる症例も多く経験しています。

適切な漢方薬を選択するためには、患者さんの疼痛の背景に隠れているものが何かを探し出すことが大切です。時間をかけて患者さんのお話にじっくりと耳を傾ける必要がありますが、そのためには患者さんとの信頼関係を築く必要があります。忙しい外来で一人の患者さんに長時間を割くことは大変ですが、神経ブロックで効果が不十分なケースに漢方治療を次の一手に使用できることは、診療の幅を広げる面からも非常にありがたい存在です。

人參養榮湯が著効した症例

代表的な補剤の一つである人參養榮湯による著効例も多く経験しています。中でも印象に残る2症例を紹介します。

1症例目は80歳代の男性患者さんです。肺気腫で呼吸がつかなく、脊柱管狭窄症(頸部・腰部)による疼痛があり、思考能力も低下していました。ヨタヨタしながら外来を受診される姿を見ながら、次回の外来診察に来ていただくことができるかどうかを心配するような状態でした。そこで、



人參養榮湯の投与を開始したところ、徐々にではありますが以前よりもしっかりと歩行ができるようになり、思考もクリアになってきちんとお話ができるようになりました。

2症例目は70歳代後半の女性で、脳梗塞による歩行障害があり、糖尿病(HbA1c \geq 10%)と高血圧症を合併していました。この患者さんは、脳梗塞に関係なく原因不明の肋間神経痛で頻回に救急外来に搬送されていたという経緯があることから、当科を紹介受診されました。私は、患者さんが訴える痛みは糖尿病に起因する多発性の神経炎痛ではないかと考えて治療を進めました。しかも思考能力が低下しており、元気がありませんでした。そこで人參養榮湯の投与を開始したところ、思考もクリアになり、元気になられ、約2ヵ月後にはHbA1cが8%台に低下しました。

これからの麻酔科医療と漢方の可能性

私は長年、ペインクリニックで漢方薬を用いていますが、患者さんの治療満足度は非常に高く、しかも患者さんの症状が軽減、さらには消失すれば服用を終了できるケースも少なくありません。

今後は手術患者さんの周術期管理における漢方治療の可能性を検討したいと考えています。具体的には、術前に何らかの漢方薬を服用しておくことで、術後の早期回復ができないかということを考えています。

漢方薬は麻酔科ペインクリニック領域において有用ですが、さらに高齢化が進展し続けるわが国の医療において、今後は大きな病気になることを漢方薬が未然に防ぐことができるようになれば良いと思います。漢方薬には免疫能を高めるなど多彩な効果があることから、これからの医療において様々な角度から、漢方薬による早期からの予防的な介入をすることで医療費の削減にもつながると思います。

取材：株式会社メディカルパブリッシャー 編集部 写真：山下裕之